

連峰 *Renpoh*

No.365

発行日●令和6年11月

発行人●輝山会記念病院

編集IMH広報委員会

長野県飯田市毛賀1707番地

TEL0265-26-8111(代)

50周年記念特別号

みなさまのおかげで
輝山会記念病院は
創立50周年を
迎えることができました



目次

- P2 創立50周年を迎えて 理事長 土屋 公威
- P3 輝山会記念病院のはじまり
- P4～P5 年表で振り返る50年のあゆみ
- P6～P17 輝山会記念病院とともに ～職員より～
- P18 編集後記

輝山会のホームページから、過去の連峰もご覧いただけます。
その他、病院の情報も更新していますのでぜひご覧ください。
広報誌の郵送をご希望の方は、お気軽にお問合せください。

ホームページ



創立50周年を迎えて

理事長 土屋 公威



このたび医療法人輝山会は創立50周年を迎えることができました。我々が歩んできた半世紀にわたる長い道のりには皆様の温かいご支援とご協力がありました。多くの患者様、地域の皆様、運営にご協力いただきました関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

当法人は、1974（昭和49）年、飯田市下殿岡に有床診療所「飯田クリニック」として創業し、3年後に現在の飯田市毛賀に移転。創立10周年の1984年には「輝山会記念病院」へ名称変更するとともに、名古屋市に新たに総合健診センター「名古屋東栄クリニック」を設立。さらに、下久堅・下條・上久堅の各診療所、介護老人保健施設「万年青苑」、社会福祉法人悠水会特別養護老人ホーム「きりしま邸苑」を開設。地域の皆様の健康と福祉を第一に考え、保健・医療・福祉の提供に努めてまいりました。2019年には輝山会総合健診センターを新築稼働し、健康維持や疾患予防・早期発見にも注力しております。

輝山会では、創立時誓詞として「保健・医療・福祉を三位一体とし、地域医療と医学ならびに人類の幸福と栄光のために献身することを厳粛に誓う」と掲げております。地域の皆様のかかりつけ病院として安全で質の高い医療、高齢化に適応した透析医療、精度の高い健康診断、住み慣れた環境で自分らしく過ごせるためのリハビリテーションおよび在宅医療の提供を当法人の使命と考え、一步一步着実に実践してきたことを大変誇りに思います。

今後も創立時の誓詞を胸に刻み50年間の歴史を振り返りながらも、常に前を向き未来に向けた取り組みを進めてまいります。地域の皆様に愛され必要とされる病院であり続けるために、保健・医療・福祉を緊密に連携させたサービスを安定的に提供し、地域医療に邁進していく所存です。

今後とも変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。皆様と共に更なる未来を築いていけることを心より願っております。



輝山会記念病院のはじまり

重篤患者の治療を契機に

輝山会記念病院の前身である飯田クリニックの開設は、前理事長の土屋隆が、両親の出身地である飯田にいた腎不全末期の重篤な患者様を紹介され、治療にあたったことがきっかけでした。

昭和48年、当時土屋は自身の出身地である名古屋市立大学医学部外科講師・医局長として多忙な日々を送っていましたが、土屋の研究テーマは移植免疫。腎移植手術と透析医療を専門とし、大学の中央透析室長も兼務していたため治療はスムーズに進み、患者様は一命を取り留めました。



飯田クリニックは下殿岡の田んぼの真ん中に建設されたプレハブ小屋でしたが、土屋と大学の透析室で一緒だった仲間や、大学医局の若い医師が飯田でのサポートを申し出てくれ、大学病院と変わらぬ透析医療を継続することができました。見た目は愛想のない貧相なプレハブではありませんでしたが、小さな手術室では何人もの命が救われていました。とはいえ入院のスペースは十分に確保できないため、クリニックから車で20分ほどの、開業間もない「シルクホテル」を病室代わりに使用したことも。そうした融通がきく時代でもありました。昭和49年、土屋は大学を退職。3月24日に許可病床数5床の有床診療所「飯田クリニック」として正式に届出をし、本格的な診療を開始することになりました。

10年の節目に「輝山会」の名を頂いて

昭和52年8月、クリニックから病院に組織変更し、飯田市毛賀に病院を新築移転しました。新たな地での開業と同時に、それまで以上に多くの患者様が押し寄せました。外来が終わった後も月・水・金曜日は昼間の透析が受けられない患者様のための夜間透析、火・木・日曜日はスタッフの勉強会が行われ、自宅までの通勤時間がもったいないと、自主的に病院の宿泊施設に泊り込むドクターやナースもいました。「昼も夜もないような日々は、正直かなりの激務だったことは確かですが、仕事をどんどん覚えていくのが楽しく、やりがいがあった」と当時を知るベテランたちは言います。

飯田クリニック開設から10年という節目の年、昭和59年に病院名を「輝山会記念病院」へ変更しました。命名ならびに揮毫は、豊丘村出身で紺綬褒章を受章される等、南画の第一人者として知られる片桐白登画伯。「輝山」は信州百名山のひとつで新・花の百名山にも選ばれている風越山を意味するそうです。新たな名称を頂き、次の10年、20年のための新しいスタートを切りました。

輝山会記念病院

輝山会記念病院 50年のあゆみ

① 飯田クリニック（昭和49年）



昭和

49

52

59

60

62

平成

3

5

6

7

9

10

12

13

14

15

16

18

20

23

26

31

令和

4

6

飯田市下殿岡に『飯田クリニック』創業 ①

本館竣工 病院へ組織変更し 飯田市毛賀に新築移転 ②

創立10周年

病院名を『輝山会記念病院』に変更 救急病院に認定

総合健診センター『名古屋東栄クリニック』設立 院歌『輝山会の歌』完成

名古屋東栄クリニック竣工 ホテル『白川邸苑』とクリニックを併設した『ヴィラ・ド・サンテ』新築移転 ③

医療法人に組織変更 特別許可老人病棟40床

事業所内保育施設『さくら保育所』を開設 創立20周年

『輝山会訪問看護ステーション』を開設 『下久堅診療所』を開設

土屋前理事長 厚生労働大臣感謝状受賞（腎不全対策推進功労者） 新館竣工 療養型病床万年青苑完成

介護保険制度導入

土屋前理事長 長野県知事表彰受賞 土屋前理事長 厚生労働大臣表彰受賞

社会福祉法人悠水会を設立 『下條診療所』を開設

別館竣工 ④

介護老人保健施設『万年青苑』稼働 特別養護老人ホーム『きりしま邸苑』稼働 創立30周年

輝山会総合健診センター本格稼働 『上久堅診療所』を開設

優良総合健診施設の認定を取得

飯田市男女共同参画推進事業者表彰受賞

創立40周年

アネックス竣工 ⑤

土屋隆前理事長退任・名誉会長就任 土屋公威理事長就任

土屋名誉会長 長野県透析医会功労表彰受賞 創立50周年

② 輝山会記念病院（昭和52年）
（㈱竹中工務店 設計・施工）



③ 名古屋東栄クリニック（昭和62年）
（㈱熊谷組 設計・施工）



④ 輝山会記念病院 別館（平成15年）
（㈱竹中工務店 設計・施工）



輝山会記念病院とともに

～輝山会の医師より～

常務理事
つちやともひろ
土屋 朋大



輝山会記念病院は創立 50 周年を迎えることができました。長年にわたり様々な形で支えてくださった関係者の皆様、職員の皆様に深く感謝いたします。

私が幼少時に見たのは前身である飯田クリニックでしたが、そこから B 館・C 館および総合健診センターの増築など、大きく変化し、成長を遂げることができました。この半世紀は現在 50 歳となった私の人生とも重なります。輝山会の節目は常に私自身の人生の節目でもあり、大変感慨深いものです。「人生 100 年時代」とも言われる現在、輝山会も私も人生の半ばにいます。この節目を迎え新たなスタート地点に立った今、次の 50 年に向けて地域医療に貢献するために努力していかなければなりません。引き続き輝山会への変わらぬご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

理事長補佐・総合健診センター長

はら おさむ
原 修

私は 1990 年 10 月に縁あって輝山会記念病院に着任いたしました。当時は腎不全医療、特に血液透析を中心とした病院でした。建物は現在の A 館のみで、B 館のある場所はテニスコートとゴルフの練習場がありました。また、C 館の場所は野原でした。初めて病院を訪れ、当時の院長であった土屋隆先生に施設を案内されながら、現在の「飯田メディカルヒルズ」の原点である「保健・医療・福祉」を三位一体とした地域医療のセンターを創設したいとの夢を語られ、その構想の実現に寄与することに賛同し、赴任した次第です。当時は、まだ患者さんの数が少なく、手術件数も少なかったため、救急医療を中心にどんな患者も受け入れる体制づくりを目指してきました。お陰様で皆様方のご理解を得られることができ、現在は A・B・C 館に加え、健診センターのあるアネックス棟も稼働しています。50 周年を迎えましたが、まだゴールではありませんので、さらなる精進を続けていく所存です。

医局のドクターたち

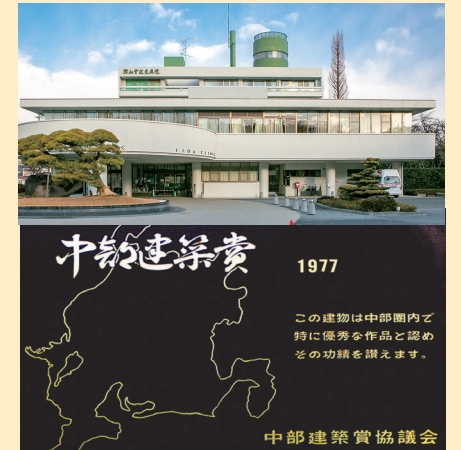


輝山会エピソード
その①

毛賀に移転 中部建築賞受賞 (昭和 52 年 8 月)

毛賀に新築移転した病院は中部建築賞を受賞しました。「中部圏域の地域社会の発展に寄与し、かつ持続可能な社会を目指すという時代の要請に対応し、地域や環境に根ざした優れた作品」に対して贈られるものでした。

受賞作である病院（現・輝山会 A 館）は前理事長の土屋がプランを描き、それをもとに株式会社竹中工務店が設計・施工を担当して下さりました。この賞は公共的な施設や大規模なホールの受賞が一般的で、民間の受賞は初めてでした。



院長 つゆく ぼ たつ お
露久保 辰夫

この度われわれ IMH グループは創立 50 周年を迎えることができました。これもひとえに地域の皆様方のご支援ご愛顧のたまものと深く感謝申し上げます。

思い返すと私がこの輝山会記念病院に入職いたしましたのは 2001 年 6 月のことでした。それまでは東京都新宿区にあります国立病院医療センターという病院に勤務しておりました。病院近くの官舎に住んでおりましたが、新宿の繁華街に近いという利便性がある反面、子供ができてからは子育てに関してはいろいろと不都合を感じておりました。そのような時期に転職のお話をいただき、この自然あふれる、また各地に温泉の湧く飯田の環境が子育てにも良いのではないかと考え、お世話になることにいたしました。それまでの病院では急性期医療のみの内容でしたが、この輝山会記念病院では地域に密着した医療を展開しており、まさに「保健・医療・福祉」三位一体の医療に携わることができ有意義な毎日をご過ごしております。これからも地域の皆様のウェルビーイング（個人や社会の良い状態）を目指すべく、職務を遂行してまいりたいと存じます。引き続き IMH グループのご愛顧をよろしくお願い申し上げます。

副院長 ひらい あつし
平井 敦

私が初めて輝山会を訪れたのは、大学の医学部の学生時代で 40 年近く前のことになります。既に天竜川沿いの現在の地に 5 階建ての建物があり（現在 A 館と呼ばれている場所です）、3 階と 4 階が病棟になっていました。当時ビックリしたのは病院なのに畳の上に布団を敷いて、そこに入院の患者さんが休んでいらっしたことでした。また入院患者さんのことをいろいろ教えていただきましたが、社会的入院をされている方も沢山いらっしやうことを思い出します。

その後もことあるごとに輝山会を訪問し、豊かな自然に囲まれた静かな病院でのひとは本当に心休まるものでした。現在病院へいらっしやう患者さん、介護施設の利用者の方にも穏やかな気持ちで過ごしていただけるような場所が提供できるように心がけて皆さんに接することができるように努めたいと思っています。

副院長・地域医療対策部長・統括診療所長

に し な ひろゆき
仁科 裕之

昭和49年3月に今の輝山会記念病院の前身となる上殿岡に飯田クリニックが誕生しました。当時の建物はプレハブ2階建てで、入口の看板は人工腎臓センター「飯田クリニック」と書かれていました。クリニックという名前に当時はなじみがなく、また、人工腎臓センターと看板のついた建物も現在の工事現場で見えるような建物であったため腎臓を作る町工場と間違われたと前理事長から笑い話で良く聞かされたのを懐かしく思い出されます。その後地域の方々からはクリニックという愛称で呼ばれるようになりましたが、歴史を振り返ると現在透析医療は一般的となっていますが、当時の透析医療は大病院での先端医療で、ましてや飯田下伊那地域ではほど遠い医療であったため、飯田の地に施設が誕生した事は奇跡であったと思われます。また、色々な偶然が重なった事で縁あって透析センターが飯田にできた事は地域の人達にとっても大変喜ばしい事であったと思います。

今回病院開設50周年を迎える事ができ、次の100周年に向かってスタートを切りましたが、これからもこの組織が地域に根付いた組織となるよう貢献したいと考えています。

輝山会エピソード
その②

名古屋東栄クリニック開設 (昭和59年12月)

これまで以上に求められる医療機関となるべく、創立10周年記念事業として、輝山会記念病院の分院となる「名古屋東栄クリニック」を名古屋市中区に開設しました。

健診センター、外来部門、宿泊施設が一体となった施設です。健康診断を受けて再検査となれば、外来受診をすることもできますし、クリニックとホテルを一体化した施設は、当時日本には他にありませんでした。

患者様ではない健診者様にリラックスして健診を受けていただけるよう、ヴィラ・ド・サンテ（健康のための別邸）というコンセプトのもと、「心をこめたおもてなし」を大切にしています。

今年開設40周年となります。

輝山会エピソード
その③

院歌 誕生 (昭和60年)

前理事長の「校歌や社歌があるのだから、病院歌があっても良いのではないか」という発想から当院に院歌ができました。

作詞は当時入院中であった歌人の久保田幸枝さんに、作曲は医師であり音楽家でもある名古屋市立大学教授の正岡昭医師に依頼しました。歌詞には飯田の四季がこめられており、歌いやすいマーチ調の曲が完成しました。今でも行事などの際に、職員により歌い継がれています。



輝山会の歌
作詞 久保田幸枝
作曲 正岡昭

知久の平を見ればわす
天竜川の巖頭に
集うわれらの栄をよめ
春のけなみの桜をよめ
いのちをよめ
われらのこころをよめ
医療の灯火をよめ
風越山を仰ぎ見て
松尾城址の裾原に
集うわれらの栄をよめ
夏万緑の戦々とき
いのちをよめ
われらのこころをよめ
医療の道を求めなん
神の峰までおのづから
朝の霧に巻かれつつ
集うわれらの栄をよめ
秋錦繡の山吹をよめ
いのちをよめ
われらのこころをよめ
医療の誠をよめなん
赤石山脈遠く望み
いま下伊那の岐の門に
集うわれらの栄をよめ
冬皚雪なる烈風をよめ
いのちをよめ
われらのこころをよめ
医療の理想をよめなん

副院長・医局長・救急センター長

まえもと かつとし
前本 勝利

創立50周年の節目の時期に変わらずに勤務ができていることに感謝いたします。これもひとえに家族の協力と支え、医局の先生方をはじめ院内のスタッフすべての協力と職場の環境の良さからだと思っております。

私が入職した頃はA館、B館のみでまだC館やアネックス棟はありませんでした。初めて創立記念、永年勤続表彰の式典に出席し、諸先輩方が勤続25年、30年の表彰されるのを見たときに長く続けられることのすごさと、どうしたら長く続けられるのだろうと思ったことが思い出されます。

現在、私は外来、病棟、手術、健診、訪問診療など急性期から慢性期にわたり、幅広く携わらせてもらっています。長く診させてもらっている方も多くなり、患者さんやその家族とも長い付き合いとなり、患者さんの病気だけでなくその方が歩んで来られた人生やご家族を含め多くの方々から、数多くのことを学ばせていただいております。

継続は力なりといいますが、1つ1つ目の前のことを着実にやっていくことで1年1年積み重ねて創立60周年につなげていけたらと思っています。

内科医長・透析センター長

しもだいら たかひろ
下平 隆寛

早いもので私も入職して14年が経ちました。入職時は医師としてまだ3年目でした。多くの方々に育てていただいたおかげで今があると思います。最初に診た患者さんのことは鮮明に覚えていますし、駆け出しの頃の私にすべてを委ねてくれた重い病気の患者さんのことも忘れることはありません。あの貴重な経験をさせていただいたことが私の医療の礎となっております。患者さんから「先生に任せるに」と言っただけることが何よりも励みになっております。地域の患者さんにかかりつけ医としての役割を果たせるようこれからも日々精進しますのでよろしくお願いいたします。

会長をはじめ、先生方、病院スタッフに助けていただき、消化器内視鏡専門医、透析専門医・指導医を取得できました。幅広い領域の医療提供ができるこの環境に感謝しています。

心身のメンテナンスをしてくれる家族、親族、友人に感謝しています。この多くの『感謝』を思い出せば、まだまだ頑張れます。よろしくお願いいたします。

総合リハビリテーションセンター長

おぜき やすのり
尾関 保則

私がリハビリテーション医として輝山会記念病院に赴任してから3年目になり、主に回復期病棟を中心に活動しております。リハビリは機能改善を図るため、身体に負荷をかけることが必要なのですが、当院の回復期病棟に入院される皆様は90歳以上の方も非常に多く、今まで経験してきたリハビリと一味違っており、日々、勉強させていただいております。

リハビリはチーム医療ですが、医師、療法士、看護師、医療ソーシャルワーカー、ケアワーカー、管理栄養士、医療事務など病院内の連携はもちろんですが、退院後の地域連携が重要であることを改めて痛感しております。

輝山記念病院50周年とのことで、長い歴史があります。私も諸先輩方を見習い、地域に根付いた医療を提供し、少しでも貢献していきたいと考えております。

輝山会エピソード
その④**院内保育所 開所**（平成5年9月）

職員のお子さんを預かる院内保育所が病院の向かいに開所しました。お子さんの体調を職員にすぐに知らせることができるため、安心して働くことができます。現在は「八重のさくら保育園」としてアネックス棟に移転しました。野菜や花を育てたり、季節の行事を楽しんだり、保育士も子どもたちも元気いっぱいです。



～ 職員より、今までとこれからと ～

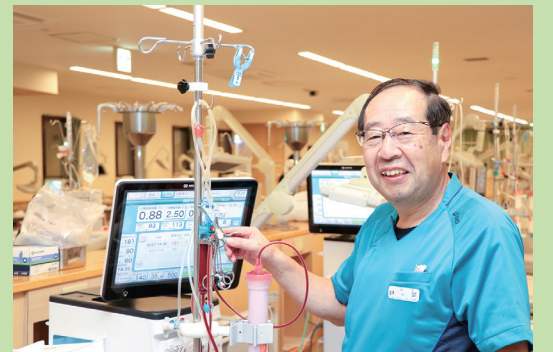
腎・透析センター 統括部長

しおざわ としかず
塩澤 利一

私が入職した当時のことを振り返ってみます。

昭和51年（1976年）3月に下殿岡の飯田クリニックは当時、2階建てのプレハブで、看護助手として透析室での勤務が始まりました。入職した初日は1日見学で終わったことを今でも記憶に残っています。

その勤務も終わりに近づいた頃、これから透析を導入するという患者さんが透析室に入ってきました。外シャントの手術（動脈と静脈にカテーテルを通して身体の外側で血管をつなぐ手術）を終えて、そのシャントを使って透析



をはじめるとのことでした。年齢は70歳位の女性でした。当時はこんなお年寄り方も透析をしなければいけないのかと思ったものでした。その後も緊急で透析を必要とする患者さんが次々入院してきました。

翌年の8月に、現在の毛賀に病院が移転となりました。週末（土曜日）になると緊急透析が必要な患者さんが運び込まれ、午後からシャント（主には外シャント）を造設し直ちに透析を開始しましたが、当時の透析効率は低く、状況によっては次の日まで12時間以上連続して行ったこともしばしばありました。この頃の透析は通常6時間で、患者さんの食事制限も厳しく、体重が少しでも増えると7～8時間を要した治療が一般的な時代でした。透析療法も黎明期の中、当時の透析装置や器材はほぼ外国製のものでした。病院の移転に伴い新しい透析装置の導入を検討するとのことで、同年秋には販売メーカーに出向し、透析液を作成する装置の第一号機を大阪の病院へ据付する工事にも同伴し、その後、製造元での研修も行い、その装置でいけるのかの見極めをした上で当院での導入に至りました。

そこから50年近くが経ち、透析機器や技術の進歩により、治療時間も短くなり、透析治療そのものも容易になってきました。その頃を振り返ると患者さんもスタッフも大変な時代の透析治療であったことを思い出します。

輝山会エピソード
その⑤**下久堅診療所 開設**（平成9年6月）

長年にわたり地域の皆様の健康を守っていた診療所が閉所することになり、輝山会がその後を託されました。下久堅は飯田市で唯一の無医地区となっており、新たな診療所の開設は2,700名余りの署名とともに要請されました。午前の診療後は広範囲で訪問診療を行い、当時は17時から19時までの夕診も行っていました。



輝山会エピソード その⑥

下條診療所、上久堅診療所 開設

平成 14 年 6 月、下條村に診療所が開設しました。下條村が無医地区となってしまう、医療体制に不安を抱えた村や村民から輝山会に対して強い要請があり、その声に応えての開設でした。いきいきらんど下條内にて診療を行っています。



平成 18 年 11 月、上久堅診療所が開設しました。上久堅地区は下久堅診療所の診療圏でありましたが、高齢化が進み通院困難な患者が増えたことから、地域住民からの要望で開所しました。



回復期リハビリ北病棟 総師長 **小林 一夫**

私が輝山会記念病院に初めて入職したのは、1989 年（平成元年）です。私は高校生の頃から看護師になろうと決めていました。卒業して看護専門学校や、看護大学へ進学も考えましたが、残念ながら学校の成績は良くないため進学は無理でした。進路指導室で情報を収集していると、働きながら看護の勉強ができる病院の情報があり、それが輝山会記念病院との出会いでした。入職させて頂き、飯田准看護学院へも働きながら通学させて頂きました。

その後、一度退職となりましたが名古屋の看護専門学校に進学させて頂き、看護師の国家資格を得ることが出来たので、1997 年（平成 9 年）に輝山会に再入職させて頂きました。それから沢山の先輩方やスタッフ、患者様にご指導いただき、いろんな経験・勉強をさせて頂きましたが、あっという間の 28 年間でした。

現在は管理職として勤務していますが、今までの経験を活かし、勉強・精進をすすめ、これからも地域住民の皆さんが安心し信頼していただける病院・施設、また看護・介護を提供できるよう、その一助として、努力・邁進して参りたいと思います。

内視鏡センター 技師長 **とよま 隆文**

私は 1982 年に入職いたしましたが、その時の当院の名称は「飯田クリニック」でした。その 2 年後の創立 10 周年には「輝山会記念病院」へと変更され、名古屋市には「名古屋東栄クリニック」が開設されました。名古屋東栄クリニック開設当初は、輝山会記念病院から私を含め数名のスタッフが出向し、約 1 年間名古屋東栄クリニックの職員と共に健診センターの運営に関わってまいりました。

職員自ら健診者となり、一連の健診コースを体験し、会議で細かな注意点など意見交換を行い、いかに健診者がストレスを感じる事なくスムーズに健診を受けていただけるか、職員全員で切磋琢磨した頃が懐かしく思い出されます。

現在私は 5 年前に完成したアネックス棟の内視鏡センターに勤務しております。今後も内視鏡検査における受診者の苦痛を最小限に抑えるための手法や、内視鏡検査の手技など試行錯誤を続け、自分なりに創意工夫を図りたいと思います。



特別養護老人ホーム きりしま邸苑

師長 **さかい くにこ 坂井 邦子**

私が入職したのは輝山会記念病院が下殿岡にあった飯田クリニックの時です。田んぼや果樹園の近くにあったプレハブの病院でした。現在のような 4 月入職ではなく、高校卒業間もない 3 月中旬だったと思います。

寮生活が始まり、午前は仕事、午後は専門学校へ通う生活が始まりました。当時の職員の人数は今ほど少なく、家庭的な温かい雰囲気がありました。若い職員も多く何事にも積極的でスポーツや勉強も意欲をもって行っていました。仕事のあと、こたつのある食堂で勉強会を行っていたのを記憶しています。職員の方々の笑顔、人に対するおもいやりが感じられた時代でした。

飯田クリニックも輝山会記念病院に変わり、時代を先取りするかのように病床、建物が増えてゆきました。私の職場も回復期、訪問看護、老人保健施設、特別養護老人ホーム 通所介護と様々な経験、体験をすることが出来ました。

高齢者の医療・福祉に携わり 20 年以上がたちました。入所されるご家族の気持ちに寄り添い、入居者さんの健康管理に注意しながら安心して安全な施設生活が送れるよう日々仕事を行っています。

退所された方のご親戚の方がこの施設なら安心と、身内の方の入所を希望されることがありました。今までの取り組みが評価され、嬉しく思いました。今後も入居者さんの尊厳を守りながら、自立した生活が維持できるよう、多職種で取り組んでゆきたいと思います。



総合リハビリテーションセンター

療法士長 しもだいら まさし
下平 剛司

愛知県の専門学校を卒業し、入職から16年が経過しました。私が入職した時、回復期病棟が100床として運用開始をする時期ということもあり、多くの同期療法士や諸先輩方に恵まれ、日々研鑽していたことを思い出します。

知識や技術が足りず、患者様が満足するサービス提供ができず、悔しい思いをすることもありました。これまで関わらせていただいた患者様、ご家族様や他職種職員の方から人間性・社会性を育ませてもらい、療法士として必要な知識や技術だけでなく、人として成長することができ、大変感謝しています。

入職時と比べ、療法士に求められる事は増え、社会の価値観も多様化する中、総合リハビリテーションセンターでは、患者様が“その人らしく生きること”を理念としています。患者様の“その人らしさ”を大事にしながら、療法士自身も“自分らしく”いることを大切に良いリハビリが提供ができるようこれからも精進していきます。



輝山会エピソード
その⑦

万年青苑・きりしま邸苑 稼働 (平成15年12月)

創立30周年事業として、介護老人保健施設「万年青苑」、特別養護老人ホーム「きりしま邸苑」が稼働開始となりました。

万年青苑（おもとえん）という名称は、「一年を通じて青々としており枯れる事のない万年青（おもと）の葉のように、いつまでも若々しくあるように、元気に社会復帰されるように」と思いが込められています。

きりしま邸苑は「丈夫で長生きをして美しい花を咲かせるキリシマツツジの花のように、いつまでもご長寿で過ごしていただくように」という思いが込められています。



介護老人保健施設 万年青苑

介護支援専門員 うめむら ひろまさ
梅村 浩正

私は昭和52年に下殿岡にあった飯田クリニックへ就職しました。初めて人工腎臓センターの看板を見た時はどのような病院なのか興味が湧くと同時に医療関係の仕事に対し不安を感じたのを覚えています。

当時は田んぼの中にあるプレハブの建物で、職員数も少なく一人一人がいろいろな役割を兼務し、仕事が終わると透析の勉強会を行い忙しくもあり充実した毎日でした。その年の8月に現在の場所に移り、大きな白い建物を初めて見た時は夏空に映えとても綺麗だった事が思い出されます。

それから47年が過ぎましたが、多くの患者さんや先輩方にご指導をいただき輝山会の発展と共に自分も成長できた事を誇りに思います。

現在は万年青苑で支援相談員として仕事をさせて頂いております。入所者が家庭的な雰囲気の中で楽しく日常生活を送ることができるよう、入所者のご家族の気持ちに寄り添いながら支援していきたいと思えます。



下條診療所

主任 うちだ
内田 みどり

開院50周年を迎え、輝山会の原点である飯田クリニックの頃を思い出しました。当時の私は、透析の知識などは全くなく、おそらく他のスタッフも経験が少ない人が多かったと思います。今にも床が抜け落ちそうなプレハブの建物で、土屋前理事長のも

と30名程のスタッフが職種を問わず日々勉強会や直接指導を受けながら、同じ方向に向かって一生懸命だった時代です。現在のように医療体制が整っていたわけではなく、昼夜関係なく飯田下伊那はもちろん、県外からも緊急透析の必要な患者さんが運ばれてきました。確実に患者さんは増え、当時はこの地域に無くてはならない病院だったと思っています。

時代の流れとともに医療や福祉制度も大きく変わり、それに対応すべく輝山会も変革してきました。今後も、この地域でいつまでも頼りにされる病院でありたいと思っています。

外来 医事課 **たぐち なおみ**
田口 直美

私が病院に初めてお世話になったのは、昭和 53 年の 4 月で毛賀に移ったばかりの春でした。病院の名前も飯田クリニックでした。その頃はまだ A 館のみで、透析が中心に行われていました。スタッフもそれほど大勢ではありませんでした。私は外来受付に配属となり、医療事務について先輩からご指導していただきました。まだコンピューターもなく、保険請求は手書きのレセプトでとても大変でした。でも手書きだったおかげで、請求点数の基礎を勉強することができました。

院内や院外の行事もいろいろ行われ参加しました。ボーリング大会や運動会は透析患者さんも一緒に参加したり、医師会主催のソフトボール大会へ出場したり、院内でバレーボール大会を行ったり、春と秋には旅行があったりと、毎年楽しい行事があり、リフレッシュしながら仕事をすることができました。

7 年半お世話になり結婚のため退職となりましたが、退職する前には病院名が輝山会記念病院に変わり、院歌もできました。平成 9 年に再就職をさせていただいていますが、病院も大きな病院となりました。後輩スタッフに私の思い出話をすることがあります。とても印象に残っている思い出があります。前理事長が家庭訪問に来られたことと、前理事長と運動会の風船運びでカードを引いたらペアになって一緒にゴールしたことです。両方とても緊張しましたが、懐かしい思い出となっています。

私もあとどれくらい働けるかわかりませんが、前理事長の教えを忘れずに、もう少し頑張ろうと思います。



名古屋東栄クリニック

薬剤課 薬局長 **かとう よしこ**
加藤 美子

名古屋東栄クリニックは、輝山会記念病院の 10 周年記念事業の一環として、1984 年 12 月に名古屋に設立された総合健診センターです。私が入職した時は名古屋の中心である栄にあり、まだ健診者様や職員の人数が少ない状態でした。

健診の予約が 10 人を越えた時には各部署のチーフが集まり、気持ち良く健診を受けて頂く為に話し合った事を今でも

覚えています。外来患者様は顔見知りになった方が多く、電車の中でも「東栄さん」と声を掛けられる事もありました。今に至るまで様々な面で本院の多くの方々に助けて頂き、心から感謝しています。

薬剤師になった時に先輩から「薬局の仕事は縁の下力持ち」だと教えられました。入職後の前理事長との初めての面談時には「周りの部署を助け、力を合わせて仕事をしなさい」とのお言葉を頂きました。このお二人の教えを守りながら、これからも仕事に励みたいと思います。

輝山会エピソード
その⑧

アネックス棟 竣工 (平成 31 年 4 月)

1 階に在宅支援センター、院内保育園、2 階に健診センター、3 階に内視鏡センターのある新たな棟ができました。

竣工式では、設計・施工を務めて下さった竹中工務店の皆様などをお招きし、テープカットや定礎式などを執り行い、その後シルクホテルで祝賀会を盛大に行いました。定礎の中には、職員の名簿や、紙幣・硬貨、竣工当日の新聞などが納められました。



～ 退職者より、思い出を振り返って～



元 チーフコンシェルジュ **たけかわ ちか子**
武川 ちか子

創立 50 周年おめでとうございます。

振り返ってみますと、歳月の長さを改めて実感いたします。仕事と子育ての両立で家族に守られながら仕事を続けられたこと、辛い経験もありましたが、苦しいことより楽しく働くことができたことが、良い思い出となって残っております。

最初は、下殿岡の地に飯田クリニックとして開業されました。飯田から名古屋の病院まで人工透析に

通われていた患者さんから、土屋前理事長に「なんとか飯田で透析を受けることができないか」と相談されたことがきっかけで、透析病院として始まりました。私たちも、初めて関わる透析医療について、必死で勉強してまいりました。前理事長は全ての業務をこなしつつ、職員の育成のため名古屋と飯田を往復し、寝る間もないくらい頑張っていたことを思い出します。そして、職員を叱咤激励しながら、慰労も考えてくださり、楽しみやご褒美などもくださり、元気づけてくださいました。一緒にスタートした仲間は、若さもエネルギーもありましたから、前理事長に応え、飯田クリニックと成長していきたい思いで励まし合って、何とか踏ん張ることができたと思っております。

最近、その仲間と話をする機会があり、当時の話に花を咲かせました。懐かしさが次から次へとこみ上げてきて、話が尽きませんでした。これまでお付き合いや、相談を続けられているかけがえのない友だちがいることが誇りであり、宝でもあります。

今年の 6 月には、病院の永年勤続表彰式にて、特別功労賞をいただくことができました。こんなに長い間働けたのは、前理事長はじめ、諸先生方、スタッフの皆さんのご支援があってこそだと、深く感謝いたしております。

まだまだ思い出は尽きませんが、無我夢中で過ごした日々を大切に、歳はとりましたが、自分でできることを見つけ、健康に過ごせたら良いかなと思っています。この長い歳月、温かく見守り教育し、仕事の機会を与えてくださった輝山会グループに深く感謝いたしまして、更なる輝山会のご発展と皆様のご健勝を祈念いたします。長い間、大変お世話様になりました。

編集後記

50年という歴史を振り返ることで、どれほど多くの方々のお力添えで現在の私たちが在るのかということということを再確認することができました。改めて、輝山会にかかわってくださったすべての皆様方に感謝申し上げます。

とはいえ、50年はひとつの区切りでしかありません。すでに60年への新たな日々はスタートしています。

現状に満足せず、つねに未来を見据えながら、これからも輝山会らしさを大切にして、保健・医療・福祉を三位一体としたサービスを提供してまいります。そして、今後もより充実した広報誌「連峰」を皆様にお届けできますよう努力してまいります。

今後とも、輝山会記念病院をどうぞよろしくお願いいたします。

輝山会記念病院 広報委員会

